

## 性格 2

小嶋祥三

一つ前の『性格』で、中学生になったわたしはなぜか絵を描けなくなった、と書いた。しかし、理由はほかの困難と同じだったろう。つまり、大きな環境の変化に圧倒され、自分を制御できなくなっていたのだと思う（なお、小学校の6年間、クラス替えがなかった）。国語、数学、理科、社会などの教科は、ある意味、刺激に反応すればよい面があるが、絵は0から作り上げる必要がある。テキストに描いてそれを提出すればよかったのかもしれないが、わたしにはそんな器用なことはできなかったようだ。そのような理由で、影響はモロに図工にでたのだろう。

わたしは内向的である。『性格』に書いたように、外部の変化に緊張してしまう自分を守ろうとしたのだろう。ある時、5因子の性格テストのNEO-PI-Rをやってみた。外向性Eの得点は極端に低く、つまり、ヒドク内向的だった。社会的な場面で強く緊張する傾向は大学の低学年でも続いていた。英語の授業で、当てられて教科書を読む羽目になった。わたしは緊張で声が出ず、つかえつつかえ、たどたどしく読んでいった。先生はアキレタように、「キミ、高校で英語をやってきたのかね」と尋ねてきた。このような状況が表面的に収まったのは、学部の高学年、大学院生になってからだろう。

比較的長い間、なんとなく、わたしは自分が自閉症スペクトラム障がい ASD 的なのかと思っていて。ある時、ASD の本の巻末に ASD の傾向をテストする質問紙がついていたので、やってみた。その結果、わたしには ASD の傾向は全くないことが分かった。そして、『性格』に書いたように、昔を思い出すと、自分は注意欠陥多動 ADHD 的だったと思うようになった。ネットで ADHD のことを調べると、結構、自分の行動に当てはまるが多かった。この HP の『若い研究者へ』で次の文章を書いている。

「わたしの人生には周期的に無闇に元気になる時期、高揚する時期があったように思う。(中略)。高揚すると、その時々を対象にとりつかれた様になった。(後略)。」

この無闇に元気がよく、活動的なのは ADHD の特徴らしい。また、好きなものにのめりこみ、とりつかれる様になるのも ADHD 的なようだ。ADHD には、漠然と、あまり良い印象を持っていなかったが、これらは研究者に好ましい傾向だったかもしれない。著名な研究者の中には ADHD 的な人がいるようだから。

わたしは ADHD 的であるが、同時に内向的でもあるので、内部に対しては活発だが、それが外部に向かうことは多くなかっただろう。自分の行動は外に開かれているというよりは、中で完結することを目指しているように思う。この HP もどなたかのお役に立つならば大変にうれしいが、何よりもまず、自己満足の面がありそうだ。